東北のコーヒー文化と共に「㈱東北萬国社」

ブランド力で最新のトレンド実現

コーヒー豆は創業時からすべて「自社焙煎」。本社併設の焙煎所でほぼ毎日焙煎しており、その量は月約3㌧になる。写真は左から焙煎士の赤塚宏之業務部コーヒー課課長、同古山寛之係長、中村明子代表取締役社長、木村陽大業務部営業開発課課長

「穏やかで質の高いコーヒーを」

―創業以来、東北のコーヒー文化と共に歩み、新たなトレンドに挑戦している㈱東北萬国社。コーヒーを通して、多くの人と出会い、感動を共有したいと語る中村明子代表取締役社長を訪ねた。

―山形を中心に東北一円に自社焙煎コーヒーを提供しています。

中村社長　当社のルーツは、仙台市を拠点としたコーヒー業者が山形県に営業所を開設したことに始まります。所長として父本郷富也が一家で仙台から山形市に移住し、後にコーヒー事業を引き継ぐかたちで創業しました。1960年のことです。当時、山形では一般にコーヒーが普及していなかったことから、ソフトクリームの販売と合わせてホテルや喫茶店にコーヒー豆を卸し、地元最大手のコーヒー業者として成長し喫茶業界をけん引してきました。2018年からは「幻のコーヒーゲイシャ」などスペシャルティコーヒーにも注力しました。

―社長就任後、新たな時代へ対応する経営に取り組んでいます。

中村社長　学習院大学経済学部経営学科を卒業後、西武百貨店に入社。93年に帰郷して東北萬国社に入りました。夫の転勤で東京に転居していったんは退社しましたが、父の死去後に復帰し、18年に母和枝の後を継いで社長に就任しました。ゼロから始めた両親は良くも悪くもトップダウン型。私は両親のようなカリスマ性はありません。「萬国珈琲」のブランド力の強みを生かし、最新のトレンド、多様なニーズ、地域社会との係りといった時代の変化に対応する経営を心掛けています。

そのためには社員1人ひとりの発想・企画・実行力を発揮できる環境づくりが私の使命と考えています。その上で、より美味しく、多様な個性ある風味を楽しんでいただくために、産地の研究、焙煎や抽出技術の向上を目指し全社員の8割がコーヒーインストラクター2級を取得するなど社員の育成に力を入れています。私自身は東京と山形を往復し、

ウイスキーの芳醇な香りを醸し出す
バレルエイジドコーヒー「No.5」

雪国山形でコーヒーを栽培するという夢のチャレンジがスタート。ハウスの平均気温12℃以上に保つことが生育の条件という

㈱東北萬国社

代表取締役社長　中村　明子
住所　〒990−0073
山形市大野目３−６−23
☎　023−631−6665
E-mail:info@bankoku-coffee.com

業界の最新動向など情報を仕入れて、社員にフィードバックしています。

２０１９年に東京・目黒にオープンしたスターバックスリザーブロースタリーで、ウイスキー樽で熟成させたバレルエイジドコーヒーに出会いました。

私たちはこの衝撃的なコーヒーを自社で作れないかと考えました。日本国内の蒸留所様から樽（バレル）を譲り受け、その樽でコーヒーの生豆を熟成し焙煎を行うとメイドインジャパンのバレルエイジドコーヒーができるのです。翌年、私たちの考えに賛同していただいた福島県の安積蒸留所様から樽を譲り受けて熟成に入り、ウイスキーの香り漂うノンアルコールコーヒーが出来上がりました。21年２月に発売し完売。次に滋賀県の長浜蒸留所様、第３弾として山形県初のウイスキー蒸留所・遊佐蒸留所様の樽を使用したコーヒーが実現しました。

―東北各地の営業拠点で「萬国珈琲まつり」を開催しています。

中村社長　地域の方々にコーヒーの美味しさと「東北萬国社」の社名を知っていただきたいという思いです。無料とはいえコロナ禍なので試飲してもらって大丈夫だろうかという意見もありましたが、回を重ねるたびに来場者が増えて６００人を超えた営業拠点もありました。当社の経営理念である「コーヒーを愛する人にも、これから出会う人にも美味しいコーヒーの喜びを届けたい」を社員が実践してくれました。

この素晴らしい出会いを得た若手社員が「皆さんに喜んでいただけるような何かができないか」と考え始め、昨季はモンテディオ山形のホーム戦の飲食店エリアブルーキッチンに出店。今季はモンテディオ山形のブロンズパートナーとなり、選手と一緒に作ったオリジナルブレンドコーヒーを発売しました。

―「コーヒーの２０５０年問題」を念頭に、雪国でのコーヒー農園づくりにチャレンジしています。

中村社長　現在は84本を育てており、花も咲き実もなりましたが、害虫がつくなど予想外の苦労もあります。しかし、地球温暖化の進行で栽培地が減り、湿度の上昇により「さび病」が発症し品質低下が懸念されています。栽培が困難になれば生産者の減少や貧困化、価格の高騰につながります。いわゆる「２０５０年問題」です。コーヒーの木は昔から父が室内で育てていました。農園は決してすぐに商売になるようなものではありませんが、社員と共に「雪降る街でとれたコーヒー」の夢を追いかけていきたいですね。